



Informatica® MDM Multidomain Edition
10.2 HotFix 1

ビジネスエンティティデータ モデルへの IDD アプリ ケーションの移行

Informatica MDM Multidomain Edition ビジネスエンティティデータモデルへの IDD アプリケーションの移行

10.2 HotFix 1

2017 年 6 月

© 著作権 Informatica LLC 2016, 2019

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、および ActiveVOS は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。お客様が本書内に問題を発見された場合は、書面にて当社までお知らせください。Informatica LLC
2100 Seaport Blvd.Redwood City, CA 94063。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2019-05-27

目次

序文	5
Informatica のリソース.....	5
Informatica Network.....	5
Informatica ナレッジベース.....	5
Informatica マニュアル.....	6
Informatica 製品可用性マトリックス.....	6
Informatica Velocity.....	6
Informatica Marketplace.....	6
Informatica グローバルカスタマサポート.....	6
 第 1 章 : ビジネスエンティティデータモデルへの IDD アプリケーションの移行	7
概要.....	7
ビジネスデータモデルの利点.....	7
 第 2 章 : データモデル間の違い	9
概要.....	9
データモデル.....	10
設定ツール.....	11
Informatica Data Director.....	11
Informatica Data Director のモード.....	12
ビュー.....	12
検索.....	14
 第 3 章 : IDD アプリケーションの移行	15
概要.....	15
前提条件.....	15
ORS と IDD アプリケーションを準備する.....	16
IDD のモードを変更する.....	17
ビジネスエンティティスキーマの生成.....	17
プロビジョニングツールへのログイン.....	18
IDD 用の E360 アプリケーションを作成する.....	18
生成されたビジネスエンティティスキーマの確認.....	19
スマート検索の有効化.....	20
スタートページをデザインする.....	21
次の手順.....	23
 第 4 章 : ワークフローアダプタの移行	25
概要.....	25
Siperian ワークフローアダプタの IDD 構成の更新.....	25

Siperian ワークフローアダプタのタスクの割り当ての設定.	26
タスクの設定.	27
プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタの設定.	27
既存の ActiveVOS タスクの処理.	28
既存の ActiveVOS タスクの処理の概要.	28
移行スクリプトの実行.	28
第 5 章: トラブルシューティング.	31
トラブルシューティング.	31
第 6 章: FAQ（よくある質問）.	32
FAQ（よくある質問）.	32
移行の FAQ.	32
IDD モードの FAQ.	33
ActiveVOS の FAQ.	34
付録 A: 用語集.	36
用語解説.	36

序文

『ビジネスエンティティデータモデルへの IDD アプリケーションの移行』のガイドへようこそ。

MDM Multidomain Edition の 10.0 より前のバージョンでは、サブジェクト領域とモデルを使用するために Informatica Data Director (IDD) を構成しました。バージョン 10.0 で、ビジネスエンティティデータモデルの使用が IDD で採用されました。サブジェクト領域データモデルは、ビジネスエンティティデータモデルとは大きく異なり、IDD アプリケーションをビジネスエンティティデータモデルに移行するタスクが困難な場合があります。この記事では、サブジェクト領域データモデルとビジネスエンティティデータモデルの主な違いについて説明し、IDD アプリケーションをビジネスエンティティデータモデルに移行する方法について説明します。

このガイドは、IDD アプリケーション開発者を対象としています。

Informatica のリソース

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica グローバルカスタマサポート、Informatica ナレッジベースなどの製品リソースをホストします。Informatica Network には、<https://network.informatica.com> からアクセスしてください。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1 つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- ドキュメント、FAQ、ベストプラクティスなどの製品リソースをナレッジベースで検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

ドキュメント、ハウツー記事、ベストプラクティス、PAM などの製品リソースを Informatica Network で検索するには、Informatica ナレッジベースを使用します。

ナレッジベースには、<https://kb.informatica.com> からアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

使用している製品の最新のドキュメントを取得するには、
https://kb.informatica.com/_layouts/ProductDocumentation/Page/ProductDocumentSearch.aspx にあ
る Informatica ナレッジベースを参照してください。

このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム
(infa_documentation@informatica.com) です。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベ
ースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica Network メンバである場合は、
PAM
(<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) に
アクセスできます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスによって開発されたヒントおよびベスト
プラクティスのコレクションです。数多くのデータ管理プロジェクトの経験から開発された Informatica
Velocity には、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を
行ってきた弊社コンサルタントの知識が集約されています。

Informatica Network メンバである場合は、Informatica Velocity リソース
(<http://velocity.informatica.com>) にアクセスできます。

Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から
Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を強化したり拡張したりするソリューションを検索
できるフォーラムです。Informatica の開発者およびパートナーの何百ものソリューションを利用して、プロ
ジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、
<https://marketplace.informatica.com> からアクセスできます。

Informatica グローバルカスタマサポート

Informatica Network の電話またはオンラインサポートからグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト
(<http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers>) を参
照してください。

Informatica Network メンバである場合は、オンラインサポート (<http://network.informatica.com>) を使用
できます。

第 1 章

ビジネスエンティティデータモデルへの IDD アプリケーションの移行

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 7 ページ](#)
- [ビジネスデータモデルの利点, 7 ページ](#)

概要

Informatica Data Director (IDD) は、サブジェクト領域データモデル (SA データモデル) に基づいていました。バージョン 10.2 では、IDD はビジネスエンティティデータモデル (BE データモデル) に基づいています。バージョン 10.2 にアップグレードすると、IDD アプリケーションを BE データモデルに移行することを選択できます。このドキュメントでは、BE データモデルの利点、データモデル間の違い、および IDD アプリケーションを BE データモデルに移行する方法について説明します。

BE データモデルは、SA データモデルよりも複数の利点があるため、BE データモデルに移行することをお勧めします。ただし、サブジェクト領域からビジネスエンティティへの移動はオプションです。IDD アプリケーションを移行する前に、特にビジネスで広範なカスタマイズとユーザーイグジットを使用している場合は、移行の影響を考慮し、異なるデータモデルの利点と相違点を確認してください。

ビジネスデータモデルの利点

BE データモデルは、SA データモデルに対して次の利点があるため、BE データモデルに移行することをお勧めします。

統合ビジネスエンティティサービス

ビジネスエンティティサービスは、MDM Hub コードを実行して、ビジネスエンティティのレコードを作成、更新、削除、検索する一連の操作です。Java コードまたは JavaScript コードを実行してビジネスエンティティサービス呼び出しを実行するカスタムユーザーインターフェースを作成できます。

BE データモデルから直接生成されるビジネスエンティティサービスを使用することで、MDM Hub テーブル構造の複雑さをエンドユーザーから隠すことができます。

構成可能なユーザーインターフェース

標準コンポーネントおよび Twitter フィードなどのカスタムコンポーネントを含めることができるユーザーインターフェースレイアウトを設計できます。ビジネスアナリストは、特定のユーザーロールを対象としたレイアウトを簡単に作成できます。

子レコードをマージする機能

サブジェクト領域では、子レコードをマージできません。ビジネスエンティティでは、同じ子孫レベルにある子レコードをマージできます。

ビジネスエンティティビュー

ビジネスエンティティビューは、ビジネスエンティティの圧縮バージョンです。ビジネスエンティティビューを使用して、既存のプロセスに一致するビューを作成すると、既存のシステムとの統合を簡素化できます。

Data as a Service (DaaS) プロバイダとの統合

サードパーティデータプロバイダからのデータを使用して、ビジネスエンティティデータを拡張できます。DaaS プロバイダと統合し、信頼性があり、正確かつ完全なデータにアクセスできます。

子孫レコードの無制限のネスト

サブジェクト領域には、孫レベルまでの子孫レコードを含めることができます。ビジネスエンティティモデルは、無制限の深さの子孫レコードを持つことができます。

改善されたユーザーインターフェース

エンティティ 360 フレームワーク画面 (E360 ビュー) は、よりクリーンでカラフルに、より直感的になりました。

データ検索の簡素化と強化

ビジネスエンティティのスマート検索では、サブジェクト領域のファセット検索よりも高速にデータが取得されます。

第 2 章

データモデル間の違い

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 9 ページ](#)
- [データモデル, 10 ページ](#)
- [設定ツール, 11 ページ](#)
- [Informatica Data Director, 11 ページ](#)

概要

BE データモデルと SA データモデルには、用語や機能ビューの違いを含む、複数の違いがあります。BE データモデルには多くの利点がありますが、BE データモデルに移行することで、いくつかの機能が失われることもあります。

次の表では、SA データモデルと BE データモデルの違いについて説明します。

サブジェクト領域データモデル	ビジネスエンティティデータモデル
IDD コンフィギュレーションマネージャを使用して構成	プロビジョニングツールを使用して構成
ユーザーイグジットのサポート	ユーザーイグジットをサポートしていません。代わりに、DaaS プロバイダ設定を使用してユーザーイグジットを置き換えます。外部サービスを作成し、内部のビジネスエンティティサービスからそれら呼び出します。
マスターデータのインポートのサポート	使用不可
マスキングデータのサポート	マスキングデータをサポートしていません。代わりに、ユーザーがアクセスできないビューを作成できます。また、Dynamic Data Masking (DDM) が MDM Hub と統合されています。DDM は、ハブコンソールを使用して構成します。
ツリーマージ解除と線形マージ解除	ツリーマージ解除のみ

サブジェクト領域データモデル	ビジネスエンティティデータモデル
Jaspersoft レポートのサポート	Jaspersoft レポートは、[スタート] ページの唯一のコンポーネントである場合にのみ、[スタート] ページで動作します。Jaspersoft レポートの代わりに Highcharts を使用することを推奨します。
マージをオーバーライドする機能	マージをオーバーライドできません。代わりに、レコードをマージしてから、[相互参照レコード] ビューを使用して正しいマージを選択します。

データモデル

BE データモデルは、SA データモデルとは大きく異なります。

サブジェクト領域データモデル

SA データモデルでは、データはサブジェクト領域を中心にして整理され、サブジェクト領域グループ内に集約されます。サブジェクト領域は、ビジネスパースペクティブの単位として扱うことができるデータの集合を表します。

物理ルックアップベースオブジェクトテーブルと IDD で使用されたメタデータまたは構成ファイル内のルックアップを構成して、ルックアップ値を入力します。

Hub Store 内のベースオブジェクト間のリレーションに基づいて、サブジェクト領域内のリレーションを構成します。サブジェクト領域の構成の詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition IDD Implementation Guide*』を参照してください。

ビジネスエンティティデータモデル

BE データモデルでは、データはビジネスエンティティを中心にして整理されます。ビジネスエンティティは、組織にとって重要なエンティティを表します。通常、組織は顧客、サプライヤ、従業員、製品、取引先を表すビジネスエンティティタイプを定義します。

ビジネスエンティティモデルは、ノードのツリーモデルです。各ノードは、MDM Hub のベースオブジェクトテーブルに対応しています。各フィールドは、MDM Hub のベースオブジェクトテーブルのカラムに対応しています。ビジネスエンティティモデルは、ルートノードに基づいています。ルートノードとビジネスエンティティは同義です。例えば、Person ルートノードのあるビジネスエンティティモデルは、Person ビジネスエンティティとみなされます。

ルートノードが確立されたら、プロビジョニングツールを使用して、親ノードに対して 1 対 1 または 1 対多のリレーションがある子ノードを作成できます。また、プロビジョニングツールを使用して、ルックアップベースオブジェクトに関連付けられているビジネスエンティティとなる参照エンティティを構成することもできます。プロビジョニングツールの詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition バージョンプロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

設定ツール

SA データモデルの場合、IDD アプリケーションを構成するには、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用します。BE データモデルの場合、IDD アプリケーションを構成するには、プロビジョニングツールを使用します。

IDD コンフィギュレーションマネージャ

IDD コンフィギュレーションマネージャは、SA データモデルに基づく IDD アプリケーションの追加、変更、および管理に使用される Web ベースのユーティリティです。IDD アプリケーションは、XML 構成ファイル、リソースバンドル、ヘルプファイル、およびその他のコンポーネントで構成されます。これらすべてのコンポーネントを含む ZIP ファイルとして完全な IDD アプリケーションをインポートまたはエクスポートできます。

IDD コンフィギュレーションマネージャは、使用可能なすべての設定オプションを公開しません。カスタムコンポーネントなどの一部の機能を構成するには、ファイルを IDD コンフィギュレーションマネージャにインポートして戻す前に、XML 構成ファイルをエクスポートして直接編集する必要があります。

IDD コンフィギュレーションマネージャの詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition IDD Implementation Guide*』を参照してください。

プロビジョニングツール

プロビジョニングツールは、ビジネスエンティティデータモデルと関連する IDD E360 アプリケーションを作成および管理するために使用する Web ベースのユーティリティです。プロビジョニングツールを使用して、ビジネスエンティティモデル、タスク、トランスフォーメーションを定義し、Informatica Data Director のユーザーインターフェースを設計できます。

次の項目を定義および設計できます。

- ビジネスエンティティ
- ビジネスエンティティビュー
- 参照エンティティ
- リレーション
- トランスフォーメーション
- タスク設定
- SOAP サービスなどの拡張機能
- ユーザーインターフェースコンポーネント
- ユーザーインターフェースのレイアウト

プロビジョニングツールの詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

Informatica Data Director

Informatica Data Director には、新しいモード、ビュー、および検索機能があります。

Informatica Data Director のモード

Informatica Data Director には 3 つのモードがあります。MDM Multidomain Edition ソフトウェアをアップグレードすると、IDD では引き続き SA ベースの従来のビューと機能が表示されます。IDD アプリケーションをビジネスエンティティデータモデルに移行したら、BE ベースの E360 ビューと機能に切り替えます。

次の表で、各種モードを説明します。

モード	説明	ユーザーインターフェース
従来のモード	<p>アプリケーションを BE データモデルに移行しない場合は、従来のモードを使用します。IDD では、SA ベースの機能とビューが引き続き表示されます。</p> <p>引き続き、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用してアプリケーションを管理します。</p> <p>注: 従来の IDD アプリケーションにワークフローが含まれている場合は、ワークフロータスクを管理するために Informatica Data Director の要件として BE スキーマを生成する必要があります。ただし、引き続き SA データモデルを使用します。BE データモデルに移行していません。</p>	<p>従来のモードでは、次のインターフェース要素が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none">- 【データビューで作成】 メニュー- 【クエリ】 メニュー- 【スタート】 ページ- 【タスク】 タブ- 従来のビューの 【データ】 タブ- 検索クエリ結果の 【検索】 タブ- 他のビューのメニューから 【データビュー】 へのリンク- カスタムタブ（構成されている場合）
E360 モード	<p>BE データモデルに移行する場合は、E360 モードを選択します。ビジネスユーザーは、BE ベースの機能と E360 ビューを使用できます。</p> <p>移行されたアプリケーションを管理するには、プロビジョニングツールを使用します。</p> <p>注: E360 モードは、新規顧客のデフォルトのモードです。新規顧客は、BE データモデルと E360 ビューで開始します。</p>	<p>次のインターフェース要素を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">- 【作成】 メニュー- 【検索】 ボックス- デザインする 【スタート】 ページ- スマート検索結果の 【検索】 タブ- 【タスクマネージャ】 タブ- E360 ビューの 【エンティティ】 タブ。タブ名は設定可能ですが、通常は開かれているビジネスエンティティの名前です。- 他のビューのメニューから 【ビジネスエンティティ】 ビューへのリンク- カスタムタブ（構成されている場合）
混合モード	<p>BE データモデルに移行しても、すべての SA ベースの機能とビューに加え、BE ベースの機能とビューにもアクセスする場合は、混合モードを使用します。</p> <p>注意: 混合モードでスキーマに変更を加える必要がある場合は、変更を 2 回行う必要があります。1 回目は IDD コンフィギュレーションマネージャで変更を行い、プロビジョニングツールでもう一度行います。混合モードは一時的にのみ使用することをお勧めします。</p>	<p>従来のモードと E360 モードのすべてのインターフェース要素を表示します。</p>

このドキュメントは、E360 モードに移行していることを前提としています。従来のモードまたは混合モードを使用する場合は、移行を開始する前に [「IDD モードの FAQ」](#)（ページ 33）を参照してください。

ビュー

エンティティ 360 フレームワーク（E360）ビューは、従来のビューに似ています。時には、E360 ビューは異なる動作をしたり、いくつかの機能強化を提供します。

注: ビューの比較では、すでに従来のビューの動作に精通していることを前提としています。

次の表では、ビュー間の類似性について説明し、次に E360 ビューの相違点について重点的に説明します。

従来のビュー (サブジェクト領域モデル)	E360 ビュー (ビジネスエンティティモデル)	ビュー間の類似性	E360 ビューの相違点
[データ] ビュー	ビジネスエンティティ	どちらのビューにも、選択したビジネスエンティティのマスターデータが表示されます。	ビジネスエンティティビューでは、エンティティの Twitter フィードなどの関連するソーシャル情報を追加できます。また、類似したビジネスエンティティを表示するコンポーネントなどの便利なコンポーネントを追加することもできます。複数のビジネスエンティティビューを構成し、ビューリストにカスタムビューを追加することができます。
[XREF] ビュー	相互参照レコード	どちらのビューにも、ソースシステムのデータを含む相互参照レコードが表示されます。ベストバージョンオブトゥールースを作成することができます。	[相互参照レコード] ビューには、すべてのレベルの子孫レコードが含まれます。
[一致] ビュー	一致するレコード	どちらのビューにも一致ルールを満たしたレコードが表示されます。	[一致するレコード] ビューでは、ユーザーは子孫レコードを照合してマージできます。ユーザーは、スマート検索を実行して、類似するレコードを検索して追加することもできます。[一致するレコード] ビューの値を手動で上書きすることはできません。
[履歴] ビュー	履歴	どちらのビューにも時系列でデータイベントが表示されます。	E360 バージョンの [履歴] ビューでは、イベントが縦方向の時系列で表示され、データ変更イベントの詳細が右側のパネルに表示されます。

従来のビュー (サブジェクト領域モデル)	E360 ビュー (ビジネスエンティティモデル)	ビュー間の類似性	E360 ビューの相違点
[有効期間] ビュー	タイムライン	どちらのビューにも、タイムラインに沿った有効期間を持つデータイベントに関する情報が表示されます。	なし
[階層] ビュー	階層	どちらのビューにも、選択したビジネスエンティティの関係が表示されます。	E360 バージョンの [階層] ビューでは、次の操作は許可されません。 <ul style="list-style-type: none"> - 重複するエンティティを検索する。類似するレコードのコンポーネントを持つビジネスエンティティビューを使用するか、一致するレコードを使用します。 - マージを開始する。このタスクには、[一致するレコード] ビューを使用します。 - ブックマークの URL を共有する。階層のイメージは引き続き共有できます。

検索

サブジェクト領域データモデルでは、検索クエリを使用してマスターデータを検索します。ビジネスエンティティデータモデルでは、スマート検索を使用してビジネスエンティティを検索します。

サブジェクト領域の検索クエリ

検索クエリを作成して、選択したフィールドで指定したフィールド値を検索します。最初に、検索するサブジェクト領域からフィールドを選択します。各フィールドに対して、フィールド内で検索する値を入力します。

ビジネスエンティティのスマート検索

スマート検索は、ビジネスエンティティで実行される全文検索です。ビジネスエンティティモデルでは、検索可能にするフィールドを指定します。IDD アプリケーションでは、ユーザーは [検索] ボックスに検索語句を入力できます。検索を制限しない限り、結果には、任意の検索可能なフィールドに検索語句を含むすべてのビジネスエンティティが含まれます。スマート検索は検索クエリよりも高速です。

第 3 章

IDD アプリケーションの移行

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 15 ページ](#)
- [前提条件, 15 ページ](#)
- [ORS と IDD アプリケーションを準備する, 16 ページ](#)
- [IDD のモードを変更する, 17 ページ](#)
- [ビジネスエンティティスキーマの生成, 17 ページ](#)
- [プロビジョニングツールへのログイン, 18 ページ](#)
- [IDD 用の E360 アプリケーションを作成する, 18 ページ](#)
- [生成されたビジネスエンティティスキーマの確認, 19 ページ](#)
- [スマート検索の有効化, 20 ページ](#)
- [スタートページをデザインする, 21 ページ](#)
- [次の手順, 23 ページ](#)

概要

この手順では、ビジネスエンティティデータモデルに移行した後、E360 モードを使用するように IDD アプリケーションを構成することを前提としています。

注: 従来のモードまたは混合モードを使用する場合は、移行を開始する前に [「IDD モードの FAQ」 \(ページ 33\)](#) を参照してください。

開始する前に、前提条件となるソフトウェアが構成されていることを確認します。

前提条件

BE データモデルおよび E360 ビューに移行する前に、スマート検索およびビジネスプロセス管理 (BPM) ワークフローをサポートするようにソフトウェアを構成します。ソフトウェアはインストールまたはアップグレー

ドプロセスの一環としてインストールされます。ソフトウェアが正しく構成されていることを確認する必要があります。

次の表に、前提条件となるソフトウェアと、構成手順の場所を示します。

ソフトウェア	説明	手順
Apache Solr と Apache ZooKeeper	MDM Hub は、Apache Solr を使用して、マスターデータ内の選択されたフィールドでスマート検索、つまり全文検索を実行します。 Apache Solr は、オープンソースのエンタープライズ検索アプリケーションです。 SolrCloud は、Solr サーバーのクラスタを使用して分散インデックス処理および検索を可能にします。ZooKeeper は、複数の Apache Solr サーバーにまたがる検索を同期する一元的なサービスです。	スマート検索の設定の詳細については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition Configuration Guide</i> 』を参照してください。
ActiveVOS	BE データモデルで BPM ワークフローを使用する場合に必要です。 MDM Hub は、ActiveVOS を使用して BPM ワークフローを実行し、レビュータスクを作成します。アップグレードするときに、ハブサーバーアップグレードプロセスの一環として ActiveVOS をインストールし、MDM Hub コンソールでワークフローエンジンとして BE ActiveVOS ワークフローアダプタを選択します。	ActiveVOS のインストールと構成の詳細については、該当する『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition Upgrade Guide</i> 』または『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド</i> 』を参照してください。

ORS と IDD アプリケーションを準備する

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）と IDD アプリケーションがビジネスエンティティモデルの要件を満たしていることを確認します。

次の表に要件を示します。

影響する領域	要件	説明
階層エンティティベースオブジェクト	外部キーリレーションが CODE カラムにマップされていること	外部キーが別のタイプのカラムにマップされている場合は、それを CODE カラムに再マップします。
サブジェクト領域名	名前にアンダースコアやその他の特殊文字がないこと	一部のサブジェクト領域名にアンダースコア文字または特殊文字が含まれている場合は、サブジェクト領域の名前を変更してアンダースコアを削除します。
検証	従来の IDD アプリケーションが有効であること	IDD コンフィギュレーションマネージャで、IDD アプリケーションを検証し、エラーを解決します。

IDD のモードを変更する

MDM Multidomain Edition ソフトウェアのアップグレード後、IDD アプリケーションを開くと、デフォルトでは従来のビューと検索クエリ機能が表示されます。移行後、E360 モードを有効にして、E360 ビューとスマート検索ボックスを表示します。

IDD のモードを変更するには、MDM Hub サーバーのプロパティファイルとプロセスサーバーのプロパティファイルでプロパティを設定します。

1. 次のディレクトリに移動します。
<MDM Hub installation directory>/hub/server/resources
2. cmxserver.properties ファイルを開きます。
3. 移行した IDD アプリケーションで表示するビューを反映するようにプロパティを設定します。

次の表に、プロパティと移行前と後の設定を示します。

プロパティ	移行前 = 従来のモード	移行後 = E360 モード
cmx.dataview.enabled	true	false
cmx.e360.view.enabled	false	true
cmx.e360.match_xref.view.enabled	false	true
cmx.ss.enabled	false	true

4. 次のディレクトリに移動します。
<MDM Hub installation directory>/hub/cleanse/resources
5. cmxcleanse.properties ファイルを開きます。
6. [3](#) で設定した値と一致するように cmx.ss.enabled プロパティを設定します。
7. プロパティファイルに変更を保存した後、アプリケーションサーバーを再起動します。

ビジネスエンティティスキーマの生成

ビジネスエンティティスキーマを生成するには、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用します。

生成プロセス中に、MDM Hub は次の移行を実行します。

- サブジェクト領域ごとにビジネスエンティティモデルを作成する
- ルックアップを参照エンティティに変換する
- リレーションを移行する

このプロセスにより、ビジネスエンティティスキーマが C_REPOS_CO_CS_CONFIG リポジトリテーブルに保存されます。

1. IDD コンフィギュレーションマネージャにログインします。
2. 移行するアプリケーションを選択します。

3. **【アプリケーション】** 画面で、**【ビジネスエンティティスキーマの生成】** をクリックします。
スキーマが作成されたことを通知するメッセージが表示されます。生成されたスキーマは、プロビジョニングツールで表示できます。

プロビジョニングツールへのログイン

スキーマを表示および強化するには、プロビジョニングツールを使用します。

1. 新しいブラウザタブを開き、IDD コンフィギュレーションマネージャで使用するのと同じ IP アドレスとポート番号を使用します。

<IP address>:<port>/provisioning/

2. IDD コンフィギュレーションマネージャで使用するのと同じユーザー資格情報を入力します。

IDD 用の E360 アプリケーションを作成する

各オペレーショナルリファレンスストア（ORS）データベースには、1 つの E360 アプリケーションを持つことができます。プロビジョニングツールで、レガシーアプリケーションと同じ ORS に基づいて E360 アプリケーションを作成します。便宜上、レガシーアプリケーションと同じ名前を付けることもできます。

注: 混合モードの使用を予定している場合は、E360 アプリケーション名がレガシーアプリケーション名と同じであることを確認する必要があります。

1. プロビジョニングツールの **【データベース】** リストから、アプリケーションを関連付けるデータベースを選択します。
2. **【UI 設定】** > **【アプリケーションエディタ】** をクリックします。
アプリケーションエディタが表示されます。
3. **【作成】** をクリックします。
4. **【プロパティ】** パネルで以下のアプリケーションのプロパティを指定します。

プロパティ	説明
名前	【アプリケーション】 パネルに表示されるアプリケーションの名前。
表示名	Informatica Data Director に表示されるアプリケーションの名前。
ソースシステム	アプリケーションを関連付けるソースシステム。
セッションタイムアウト（分）	アイドル状態の Informatica Data Director セッションがタイムアウトするまでに待機する分単位の時間。

5. **【適用】** をクリックします。
作成したアプリケーションが **【ツリービュー】** パネルと **【アプリケーション】** パネルに表示されます。

6. 変更内容を MDM Hub にパブリッシュします。
 - a. **【パブリッシュ】** をクリックします。

変更の確認ダイアログボックスが表示され、変更内容を確認するように求められます。
 - b. 変更内容を確認し、**【確認】** をクリックします。

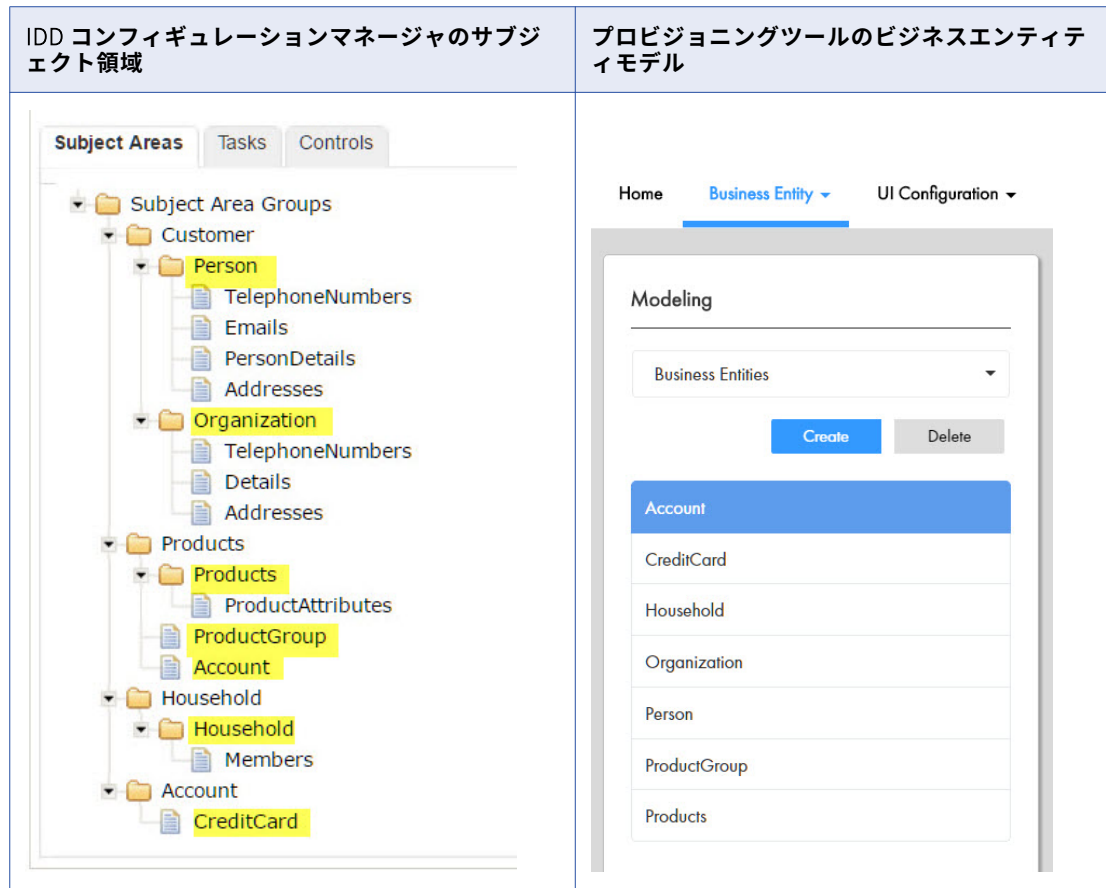
アプリケーションで検証プロセスが実行されます。確認ダイアログボックスが表示され、変更内容をパブリッシュするように求められます。
 - c. 次のいずれかのボタンをクリックします。
 - **【パブリッシュ】**。変更内容を MDM Hub に保存します。
 - **【いいえ】**。変更内容は一時ワークスペースに残ります。

生成されたビジネスエンティティスキーマの確認

プロビジョニングツールを使用して、ユーザーフレンドリなインターフェースでスキーマを表示および強化します。

1. プロビジョニングツールで、データベース用に E360 アプリケーションを選択します。
2. **【ビジネスエンティティ】** > **【モデリング】** をクリックします。
3. ドロップダウンリストから **【ビジネスエンティティ】** を選択します。

次の画像は、サブジェクト領域の元の一覧と、生成されたビジネスエンティティモデルの一覧を示しています。



4. ルックアップを表示するには、ドロップダウンリストから **【参照エンティティ】** を選択します。
5. リレーションを表示するには、ドロップダウンリストから **【リレーション】** を選択します。

スマート検索の有効化

スマート検索を有効にするには、ビジネスエンティティモデルを開き、検索可能にするフィールドを選択します。完了したら、MDM Hub コンソールから **【スマート検索データの初期インデックス処理】** バッチジョブを実行します。

注意: rowidObject フィールドは検索可能にマークしないでください。ビジネスエンティティデータモデルでは、rowidObject フィールドの検索はサポートされていません。

すべてのビジネスエンティティモデルでバッチジョブを実行します。

1. プロビジョニングツールで、**【ビジネスエンティティ】** > **【モデリング】** をクリックし、**【ビジネスエンティティ】** を選択します。
2. ビジネスエンティティモデルをクリックします。
ビジネスエンティティモデルが開きます。

3. [ビジネスエンティティ] パネルで、[フィールド] フォルダを展開します。
すべてのフィールドが表示されます。
4. 検索可能にするフィールドごとに、フィールドを選択し、[プロパティ] パネルで **[検索可能]** をクリックします。
5. ビジネスエンティティモデルで検索可能フィールドを特定したら、**[パブリッシュ]** をクリックします。
注目: 検索可能フィールドをデータベースにパブリッシュする必要があります。変更をパブリッシュしないと、インデックスを作成するための検索可能なフィールドがないため、次の手順が失敗します。
6. MDM Hub コンソールで、検索可能なフィールドを含むビジネスエンティティモデルに対して、**[スマート検索データの初期インデックス処理]** バッチジョブを実行します。
 - a. ハブコンソールにログインし、オペレーショナルリファレンスストアデータベースを選択します。
 - b. [ユーティリティ] ワークベンチで、**[バッチビューア]** をクリックします。
 - c. **[プロセスタイプでグループ化]** を選択します。
 - d. **[スマート検索データの初期インデックス処理]** を見つけます。
 - e. 各ビジネスエンティティモデルを選択し、**[バッチの実行]** をクリックします。
インデックスバッチジョブが実行されます。
ヒント: または、バッチグループを作成し、インデックスを作成するビジネスエンティティモデルにすべてのインデックスジョブを追加してから、バッチグループを実行することもできます。

スタートページをデザインする

E360 アプリケーションのスタートページは、レイアウトデザイナーでデザインします。[スタート] ページで、タスクインボックス、グラフ、ソーシャルメディアフィード、およびその他の外部リソースなどのコンポーネントを追加します。

場合によっては、それらを [スタート] ページに追加する前にコンポーネントを設計する必要があります。コンポーネントとレイアウトの詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

1. プロビジョニングツールで、**[UI 設定] > [レイアウトデザイナー]** をクリックします。
レイアウトデザイナーが表示されます。
2. **[作成] > [スタートページ]** をクリックします。
[レイアウトプロパティの定義] ページが表示されます。
3. 設計するレイアウトを定義して特定するために、以下のプロパティを指定します。

プロパティ	説明
レイアウト名	設計するレイアウトのラベル。レイアウトを設計してパブリッシュしたら、ラベルがレイアウトデザイナーのレイアウトリストに表示されます。
一意のラベル	システム ID を生成するために使用されるラベル。

プロパティ	説明
説明	オプション。レイアウトを識別するためのわかりやすい説明。
リストオプション名	Informatica Data Director のビューリストに表示するオプションのラベル。

4. **【次へ】** をクリックします。

【目的の定義】 ページが表示されます。

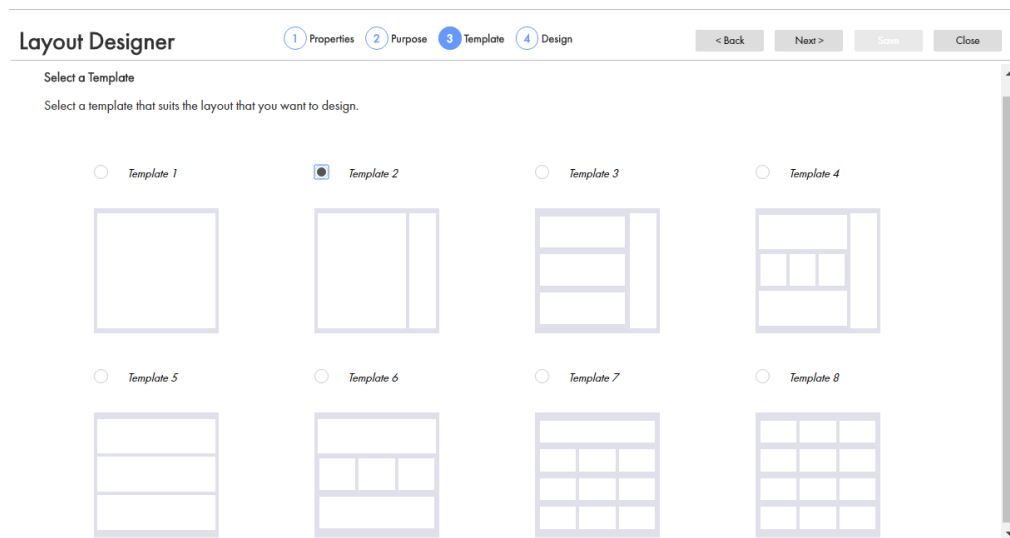
5. レイアウトにアクセスできるユーザーロールを選択します。

【目的の定義】 ページに表示されるユーザーロールは、MDM Hub 環境で設定します。

6. **【次へ】** をクリックします。

【テンプレートを選択】 ページが表示されます。

次の図は、**【テンプレートを選択】** ページを示しています。



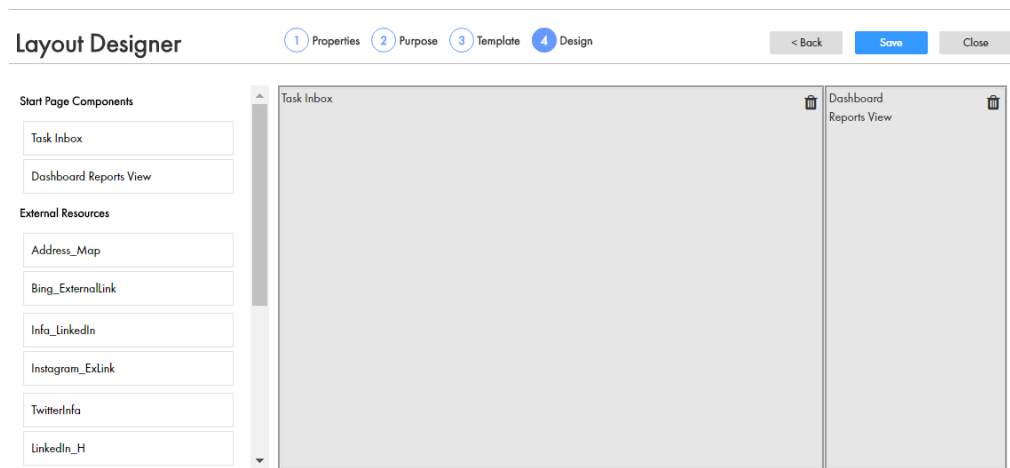
7. スタートページに必要なコンポーネントを表示するのに適したテンプレートを選択し、**【次へ】** をクリックします。

【デザイン】 ページが表示されます。

8. スタートページのレイアウトに必要なコンポーネントをワークスペース内にドラッグします。

例えば、**【タスクインボックス】** コンポーネントと **【ダッシュボードレポートビュー】** コンポーネントをワークスペースにドラッグします。

次の図は、【タスクインボックス】コンポーネントと【ダッシュボードレポートビュー】コンポーネントがワークスペースにある【デザイン】ページを示しています。



9. 【保存】をクリックします。

設計したスタートページがスタートページのレイアウトカテゴリの下に表示されます。

10. 変更内容を MDM Hub にパブリッシュします。

a. 【パブリッシュ】をクリックします。

変更の確認ダイアログボックスが表示され、変更内容を確認するように求められます。

b. 変更内容を確認し、【確認】をクリックします。

アプリケーションで検証プロセスが実行されます。確認ダイアログボックスが表示され、変更内容をパブリッシュするように求められます。

c. 次のいずれかのボタンをクリックします。

- 【パブリッシュ】。変更内容を MDM Hub に保存します。
- 【いいえ】。変更内容は一時ワークスペースに残ります。

次の手順

BPM ワークフローとタスクを実装する場合、最後の必須ステップとして、ActiveVOS ワークフローアダプタを設定し、タスクトリガを定義し、既存のタスクを処理します。次のセクションを参照してください。

将来的には、プロビジョニングツールを使用してアプリケーションを更新およびカスタマイズします。

E360 アプリケーションは、次の方法でカスタマイズできます。

- エンティティビューのコンポーネントとレイアウトをデザインする
- クレンジングトランスフォーメーションを構成する
- フィールドのサブセットを含むビジネスエンティティビューを作成する
- 新しいビジネスエンティティモデルを作成する
- サードパーティのデータプロバイダなどのサービスの拡張機能を追加する

E360 アプリケーションのカスタマイズの詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

IDD コンフィギュレーションマネージャの機能がプロビジョニングツールにどのようにマップされているかの詳細については、[「移行の FAQ」 \(ページ 32\)](#)を参照してください。

第 4 章

ワークフローアダプタの移行

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 25 ページ](#)
- [Siperian ワークフローアダプタの IDD 構成の更新, 25 ページ](#)
- [Siperian ワークフローアダプタのタスクの割り当ての設定, 26 ページ](#)
- [タスクの設定, 27 ページ](#)
- [プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタの設定, 27 ページ](#)
- [既存の ActiveVOS タスクの処理, 28 ページ](#)

概要

BE データモデルを使用するように Informatica Data Director を移行する場合は、Siperian または SA ActiveVOS ワークフローアダプタから BE ActiveVOS ワークフローアダプタに移行する必要があります。

BE ActiveVOS ワークフローアダプタは、BE ActiveVOS ワークフローを使用します。BE ActiveVOS ワークフローは、ビジネスエンティティで動作します。E360 の「一致するレコード」ビューなどの一部の画面では、子エンティティのマージをサポートするために BE ActiveVOS ワークフローが必要です。

MDM Hub は、プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタをサポートしています。セカンダリアダプタを使用すると、BE ActiveVOS ワークフローアダプタに移行するときに、古いワークフローアダプタを使用して既存のタスクを処理できます。ワークフローアダプタを移行するときは、BE ActiveVOS ワークフローアダプタをプライマリアダプタとして設定します。

Informatica Data Director は、タスクを処理するための適切な画面を起動します。例えば、マージ解除タスクが移行前に作成されていると、そのタスクが処理される際に、従来の「XREF」ビューが起動されます。

Siperian ワークフローアダプタの IDD 構成の更新

タスクマネージャで Siperian ワークフローアダプタタスクを表示するには、Informatica Data Director 構成ファイルのタスク設定を更新します。

1. Siperian BPM タスクタイプ設定を更新します。
 - `defaultApproval="true"`を `defaultApproval="false"`に変更します。
 - `creationType` を `NONE` に設定します。

2. ActiveVOS タスクのタスク設定を追加します。
次のコードサンプルは、Informatica Data Director 構成ファイルでのビジネスエンティティベースの ActiveVOS タスクの設定方法を示しています。

```
<tasks includeUnassignedTasks="true">
  <!-- Task Definitions -->
  <taskType taskTypeId="BeMergeTask" name="AVOSBeMerge" displayName="Merge"
    creationType="MERGE" displayType="MERGE">
    <description>Merge two records together.</description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeUnmergeTask" name="AVOSBeUnmerge"
    displayName="Unmerge" creationType="UNMERGE" displayType="UNMERGE">
    <description>Unmerge an XREF record from a Base Object record.
    </description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeOneStepApprovalTask" name="AVOSBeFinalReview" displayType="NORMAL"
    displayName="Final review" creationType="NONE" pendingBVT="true">
    <description>Update a record and require the user to go through an
    approval process before completing the task.
    </description>
  </taskType>

  <taskType name="AVOSBeNotification" displayName="Notification"
    creationType="NONE" displayType="NORMAL">
    <description>Notification step in the workflow</description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeTwoStepApprovalTask" name="AVOSBeReviewNoApprove" displayType="NORMAL"
    displayName="Review no approve" creationType="NONE" defaultApproval="true" pendingBVT="true">
    <description>Update a record and require the user to go through an
    approval process before completing the task.
    </description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeUpdateWithApprovalTask" name="AVOSBeUpdate"
    displayName="Update" creationType="CREATE" pendingBVT="true" displayType="NORMAL">
    <description>Update a record and do not require the user to go through an approval
    process before completing the task. The approval step is optional.
    </description>
  </taskType>
</tasks>
```

Siperian ワークフローアダプタのタスクの割り当ての設定

ビジネスエンティティに基づく ActiveVOS ワークフローアダプタへのタスクの割り当てを設定するには、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用してサブジェクト領域ごとにタスクの割り当てを設定します。タスクを直接割り当てることも、タスクマネージャによってタスクがユーザーに割り当てられるようにすることも可能です。

1. Informatica Data Director コンフィギュレーションマネージャにログインします。
`http://[host]:[port]/bdd/config/`
2. 更新するアプリケーションを選択します。
3. **【編集】** をクリックします。
4. **【サブジェクト領域】** タブでサブジェクト領域を選択して、**【サブジェクト領域の編集】** をクリックします。

5. **【タスクの割り当て】** タブをクリックし、**【追加】** をクリックします。
6. **【タスクの割り当て】** ダイアログボックスで、タスクのリストから設定するタスクを選択します。
7. タスクの割り当てが可能なロールとユーザーを選択します。**【OK】** をクリックします。
8. **【保存】** をクリックします。
9. **【ビジネスエンティティスキーマの生成】** をクリックします。コンフィギュレーションマネージャによって、ビジネスエンティティとビジネスエンティティサービスの設定が生成されます。
10. MDM Hub で、リポジトリマネージャを使用してオペレーショナル参照ストアを検証します。リポジトリマネージャの検証によって、アプリケーションサーバーにキャッシュされているリポジトリデータがリフレッシュされます。

タスクの設定

BE ActiveVOS ワークフローアダプタに切り替える場合は、プロビジョニングツールを使用して、BE ActiveVOS ワークフローを使用するようにタスクを設定します。

プロビジョニングツールで、次のタスクプロパティを設定できます。

ワークフローを起動できるユーザーの定義

特定のイベント後に適切な ActiveVOS^(R)タスクワークフローが起動されるように、タスクトリガを設定します。

タスクを引き受けることができるユーザーの定義

タスクタイプの設定で、ActiveVOS タスクを引き受けることができる、つまり ActiveVOS タスクの割り当て対象となるユーザーロールを定義します。

デフォルトのタスクプロパティの定義

特定のプロパティを使用してタスクが作成されるように、タスクテンプレートを設定できます。例えば、トリガがワークフローを起動したときに、タスクに特定のタイトル、優先度、期限、およびタスクステータスが設定されるように指定できます。

プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタの設定

BE ActiveVOS ワークフローアダプタに移行するには、BE ActiveVOS ワークフローエンジンをプライマリワークフローエンジンとして選択します。ビジネスエンティティのワークフローアダプタの名前は、BE ActiveVOS です。既存のタスクをセカンダリワークフローエンジンで処理することはできませんが、タスクを作成することはできません。プライマリとセカンダリに同じワークフローエンジンを選択しないでください。

ActiveVOS を搭載した Informatica MDM Multidomain Edition を今まで使用したことがない場合、プライマリワークフローアダプタとして BE ActiveVOS アダプタを選択します。既存タスクを処理するのにセカンダリワークフローアダプタを選択する必要はありません。

注: IDD 設定がサブジェクト領域に基づいている場合は、プライマリワークフローエンジンとして Informatica ActiveVOS アダプタの使用を継続します。

ワークフローエンジンを追加すると、これがプライマリワークフローエンジンになり、既存のプライマリワークフローエンジンはセカンダリワークフローエンジンになります。既存のセカンダリワークフローエンジンが

ある場合、これはオペレーショナルリファレンスストアから削除され、そのタスクがタスクインボックスから削除されます。

1. Hub コンソールの設定ワークベンチで、**[Workflow Manager]** をクリックします。
2. 書き込みロックを取得します。
3. **[ワークフローエンジン]** タブを選択し、次の BE ActiveVOS ワークフローアダプタ情報が正しいことを確認します。
 - ActiveVOS サーバーホスト
 - ActiveVOS サーバーポート
 - 信頼できるユーザーのユーザー名
 - 信頼できるユーザーのパスワード
 - MDM Hub と ActiveVOS サーバーとの間の通信のプロトコル
4. **[オペレーショナルリファレンスストアのワークフローマッピング]** タブを選択します。
タブのテーブルでは、Hub ストア内のすべてのオペレーショナル参照ストアデータベースが含まれています。
5. **[プライマリワークフローエンジン]** カラムで、BE ActiveVOS ワークフローアダプタのワークフローエンジンを選択します。
6. **[セカンダリワークフローエンジン]** カラムで、ワークフローエンジンを選択します。

既存の ActiveVOS タスクの処理

既存の ActiveVOS タスクの処理の概要

MDM Multidomain Edition バージョン 10.1 より前に作成された ActiveVOS タスクを使用するには、移行スクリプトを実行して必要なプレゼンテーションパラメータをタスクに入力します。移行スクリプトを実行しないと、タスクがタスクマネージャに表示されません。バージョン 10.1 にアップグレードする前に作成されたすべてのタスクが処理されるまで、移行スクリプトを実行します。

移行スクリプトの実行

MDM Multidomain Edition バージョン 10.1 より前に作成された ActiveVOS タスクを使用するには、移行スクリプトを実行して必要なプレゼンテーションパラメータをタスクに入力します。移行スクリプトを実行しないと、タスクがタスクマネージャに表示されません。すべてのタスクが完了するまで、スクリプトを定期的に実行してください。

注: スクリプトを実行するには、プロパティファイルを使用できます。プロパティファイルにパスワードを格納しない場合は、コマンドでプロパティを使用してスクリプトを実行できます。

1. すべてのタスク管理ロールに属する MDM Hub スーパーユーザーを作成します。

ActiveVOS 移行ユーティリティでは、すべてのタスク管理ロールに属するスーパーユーザーを作成する必要があります。

注: 移行後、タスクは、アップグレード前に割り当てられていたのと同じユーザーに割り当てられます。

2. プロパティファイルを使用してスクリプトを実行するには、次の手順を実行します。
 - a. テキストエディタで次のファイルを開きます。
 <MDM Hub installation directory>: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin\build.properties
 - b. 次のプロパティを build.properties ファイルに追加します。

プロパティ	説明
avos.jdbc.database.driver.jar	ActiveVOS データベースの JDBC ドライバが含まれる JAR ファイルへのパス。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.driver.class	ActiveVOS データベースの JDBC ドライバクラス。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.url	ActiveVOS データベースの接続 URL。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.username	ActiveVOS データベースのユーザー名。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.password	ActiveVOS データベースのパスワード。
avos.ws.protocol	ActiveVOS サーバー接続のプロトコル。http または https になります。
avos.ws.host	ActiveVOS が実行されるアプリケーションサーバーのホスト名。
avos.ws.port	アプリケーションサーバー接続のポート番号。
avos.ws.trusted.username	信頼されたユーザーのユーザー名。 注: 信頼されたユーザーは、MDM Multidomain Edition のインストールおよびアップグレードプロセスの一環として作成されます。
avos.ws.trusted.password	信頼されたユーザーのパスワード。 注: 信頼されたユーザーは、MDM Multidomain Edition のインストールおよびアップグレードプロセスの一環として作成されます。
avos.hub.username	すべてのタスク管理ロールに属する MDM Hub スーパーユーザー。

プロパティ	説明
avos.ws.pagesize	1つのデータベーストランザクションで処理され、ActiveVOS からバッチロードされるタスクの数。
avos.ws.statuses	オプション。処理する ActiveVOS タスクステータスのカンマ区切りリスト。例えば、READY や IN_PROGRESS などです。デフォルトではすべてのタスクが処理されます。

- c. コマンドプロンプトを開きます。
 - d. 次のディレクトリに移動します。
 - UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
 - Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin
 - e. 次のコマンドを使って MDM Hub マスターデータベースのアップグレードスクリプトを実行します。
 - UNIX の場合:sip_ant.sh migrate-avos-sa-tasks
 - Windows の場合:sip_ant.bat migrate-avos-sa-tasks
3. コマンドでプロパティファイルを指定してスクリプトを実行する場合は、次の手順を実行します。
 - a. コマンドプロンプトを開きます。
 - b. 次のディレクトリに移動します。
 - UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
 - Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin
 - c. コマンドでプロパティを指定して MDM Hub マスターデータベースアップグレードスクリプトを実行します。例えば、次のコマンドを実行できます。
 - UNIX の場合:sip_ant.sh migrate-avos-sa-tasks -Davos.jdbc.database.password=!!cmx!! -Davos.ws.protocol=http -Davos.ws.host=localhost -Davos.ws.port=8080 -Davos.ws.pagesize=100 -Davos.ws.trusted.username=avos -Davos.ws.trusted.password=avos -Davos.hub.username=admin
 - Windows の場合:sip_ant.bat migrate-avos-sa-tasks -Davos.jdbc.database.password=!!cmx!! -Davos.ws.protocol=http -Davos.ws.host=localhost -Davos.ws.port=8080 -Davos.ws.pagesize=100 -Davos.ws.trusted.username=avos -Davos.ws.trusted.password=avos -Davos.hub.username=admin
 4. スクリプトは定期的に行います。
 5. サブジェクト領域ワークフローアダプタのすべてのタスクが処理されたら、スクリプトを実行する必要はなくなり、スーパーユーザーを削除できます。

第 5 章

トラブルシューティング

- [トラブルシューティング, 31 ページ](#)

トラブルシューティング

IDD の SA データモデルから IDD の BE データモデルに移行する際に問題に直面した場合は、次の情報を使用して問題のトラブルシューティングを行います。

IDD の構成が無効

ビジネスエンティティスキーマを生成する場合、階層マネージャのエンティティベースオブジェクトで、階層マネージャが有効になっているビジネスエンティティのリレーションが正しく変換されない場合があります。

この問題を解決するには、IDD コンフィギュレーションマネージャで、階層マネージャのエンティティベースオブジェクトを使用してサブジェクト領域を編集します。数値のサブタイプ値は、無効な IDD 構成を示します。**[HM エンティティタイプ]** フィールドで、別のエンティティタイプを選択し、**[サブタイプの値]** フィールドの値が数値以外の値に変わるまで、元のエンティティタイプを再度選択します。

スマート検索が機能しない

次の手順をすべて実行したことを確認します。

1. ハブコンソールで、スマート検索と ZooKeeper を設定します。1 つのプロセスサーバーを ZooKeeper のサーバーとして構成します。
2. cmxserver.properties ファイルと cmxcleanse.properties ファイルの両方で cmx.ss.enabled=true を設定します。
3. IBM WebSphere を使用している場合は cmxcleanse.properties ファイルで pingSolrOnStartup=true を設定します。
4. E360 アプリケーションで、ビジネスエンティティモデルでフィールドを検索可能としてマークします。
5. 検索可能なフィールドを使用してスキーマをパブリッシュします。
6. MDM Hub コンソールから、すべてのビジネスエンティティに対して検索インデックスバッチジョブを実行します。

従来のタスクはビジネスエンティティを従来のビューで開くが、従来のビューをオフにしました。

このタスクは、従来の IDD アプリケーションから移行されました。タスクからエンティティを開くと、エンティティは編集されたビューで開かれます。従来のタスクをすべて閉じると、従来のビューは今後使用されなくなります。

第 6 章

FAQ（よくある質問）

- [FAQ（よくある質問）, 32 ページ](#)

FAQ（よくある質問）

ここでは、BE データモデルへの IDD アプリケーションの移行についてよく寄せられる質問のリストを示します。

リストは次のカテゴリに分類されています。

- [「移行の FAQ」 \(ページ 32\)](#)
- [「IDD モードの FAQ」 \(ページ 33\)](#)
- [「ActiveVOS の FAQ」 \(ページ 34\)](#)

移行の FAQ

ビジネスエンティティデータモデルへのアップグレードは必須ですか？

いいえ。Informatica では、IDD でビジネスエンティティを使用することを推奨していますが、サブジェクト領域データモデルを使用するお客様も引き続きサポートします。ただし、作業するタスクのビジネスエンティティスキーマを生成する必要があります。

さらに、ビジネスエンティティに移行した後は、サブジェクト領域だけを使用しないことをお勧めします。データスチュワードの間で混乱を招く可能性があり、データへの変更が失われる可能性があります。

ビジネスエンティティでもユーザーイグジットを使用できますか？

いいえ。ユーザーイグジットは、エンティティ 360 フレームワークに移行されません。ただし、IDD で外部呼び出しを使用して、ユーザーイグジットの一部の機能を置き換えることができます。

ビジネスエンティティでタスクインボックスを使用できますか？

はい。タスクインボックスを使用できます。タスクインボックスは [タスクマネージャ] ページにあり、[スタート] ページに追加することもできます。タスクインボックスには、ActiveVOS がインストールおよび構成されている必要があります。

IDD でビジネスエンティティデータモデルに移行する場合の欠点がありますか？

サブジェクト領域データモデルとビジネスエンティティデータモデル間では、一部の機能がありません。例えば、Raw データをシステムにインポートしてエクスポートするのがより困難です。ただし、ビジネスエンティティデータモデルには、他のシステムとの統合や構成可能なページとビューなど、複数の利点があります。詳細については、[「ビジネスデータモデルの利点」 \(ページ 7\)](#)および[「概要」 \(ページ 9\)](#)を参照してください。

リポジトリマネージャの変更リストには、ビジネスエンティティに関する情報が含まれていますか？

はい。ハブコンソールでリポジトリマネージャから変更リストをエクスポートすると、変更リストにはすべてのビジネスエンティティの詳細が含まれます。リポジトリマネージャから変更リストをインポートすることもできます。

ビジネスエンティティデータモデルで ActiveVOS を使用する必要がありますか？

はい。ActiveVOS は、ビジネスエンティティデータモデルに対してサポートされている唯一の BPM エンジンです。ActiveVOS の構成方法の詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition Informatica Data Director - Informatica ActiveVOS 統合ガイド*』を参照してください。

プロビジョニングツールの使用方法を教えてください。

次の表で、IDD コンフィギュレーションマネージャの一般的な構成と、プロビジョニングツールにおけるそれに相当するものについて説明します。

構成方法	IDD コンフィギュレーションマネージャ	プロビジョニングツール
サブジェクト領域/ ビジネス エンティ ティ	<ol style="list-style-type: none">1. IDD アプリケーションを選択します。2. [サブジェクト領域] タブで、[サブジェクト領域の追加] をクリックします。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [モデリング] をクリックします。2. [ビジネスエンティティ] を選択します。
ルックアップ/参照 エンティ ティ	<ol style="list-style-type: none">1. ハブコンソールで、スキーママネージャを使用して、ベースオブジェクトをルックアップベースオブジェクトとして構成します。2. ベースオブジェクトとルックアップベースオブジェクトの間に外部キーリレーションを作成します。3. IDD では、この外部キーリレーションに関するメタデータを使用してルックアップ値が入力されます。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [モデリング] をクリックします。2. [参照エンティティ] を選択します。
リレーシ ョン	<ol style="list-style-type: none">1. ハブコンソールで、スキーママネージャを使用して、ベースオブジェクト間のリレーションを構成します。2. IDD では、関連付けられたベースオブジェクト間のリレーションに基づいて、サブジェクト領域内にリレーションが作成されます。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [モデリング] をクリックします。2. [リレーション] を選択します。
タスク	<ol style="list-style-type: none">1. IDD アプリケーションを選択します。2. [タスク] タブで、[追加] をクリックします。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [タスク] をクリックします。2. タスクテンプレート、タスクタイプ、およびトリガを定義できます。

IDD モードの FAQ

アップグレード後、引き続き従来のビューだけを表示することはできますか？

はい。IDD アプリケーションを BE データモデルに移行する必要はありません。

アップグレード後、IDD アプリケーションに BPM ワークフローが含まれていない場合は、このガイドの手順を実行する必要はありません。

IDD アプリケーションに BPM ワークフローが含まれている場合は、ビジネスエンティティスキーマを生成する必要があります。Informatica Data Director には、スキーマが存在する必要があります。同じワークフローエンジンを引き続き使用できます。IDD モードを変更したり、プロビジョニングツールを使用する必要はありません。

注: このモードでは、BE データモデルに基づく機能とビューは使用できません。

SA データモデル、従来のビュー、およびワークフローエンジンを引き続き使用するには、ビジネスエンティティスキーマを生成します。

1. [「ORS と IDD アプリケーションを準備する」 \(ページ 16\)](#)
2. [「ビジネスエンティティスキーマの生成」 \(ページ 17\)](#)

従来のビューと E360 ビューを同時に表示することはできますか？

はい。両方のビューのセットを表示することができます。これを混合モードと呼びます。例えば、[スタート] ページとエンティティビューのレイアウトをデザインする間、一時的に混合モードを使用することができます。

注意: 混合モードでは、スキーマに変更を加える必要がある場合、変更を 2 回行う必要があります。1 回目は IDD コンフィギュレーションマネージャで変更を行い、プロビジョニングツールでもう一度行います。IDD コンフィギュレーションマネージャからスキーマを再生成し、変更をプロビジョニングツールでパブリッシュすると、移行した要素に対して行ったカスタマイズが上書きされます。サブジェクト領域とは異なる名前を持つビジネスエンティティモデルなどの新しい要素は、上書きされないため保持されます。

混合モードを使用するには、このドキュメントのすべての手順を実行します。モードを変更する場合は、次の設定を使用します。

プロパティ	混合モード
cmx.dataview.enabled	true
cmx.e360.view.enabled	true
cmx.e360.match_xref.view.enabled	true
cmx.ss.enabled	true

プロビジョニングツールでは、従来の IDD アプリケーションと同じ名前の IDD E360 アプリケーションを作成する必要があります。

ActiveVOS の FAQ

サブジェクト領域ベースの ActiveVOS ワークフローアダプタを使用している場合、マージおよびマージ解除のタスクを作成するにはどのビューを使用したらよいですか？

サブジェクト領域ベースの ActiveVOS ワークフローアダプタを使用している場合は、従来の [一致] ビューと [XREF] ビューを使用します。これらの従来のビューを使用してタスクを作成するには、cmx.e360.match_xref.view.enabled を false に設定します。バージョン 10.2 にアップグレードすると、cmx.e360.match_xref.view.enabled はデフォルトで false になっています。

既存のマージタスクはどのように処理されますか？

バージョン 10.2 より前に作成されたすべてのマージタスクは、従来の [一致] ビューで開かれます。エンティティ 360 フレームワークを有効にすると、バージョン 10.2 で作成されたマージタスクは、エンティティ 360 フレームワークの [一致するレコード] ビューで開かれます。

マージ解除タスクはどのように処理されますか？

すべてのマージ解除タスクは、cmx.e360.match_xref.view.enabled の設定に関係なく、エンティティ 360 フレームワークの [相互参照レコード] ビューで開かれます。

レビュータスクはどのように処理されますか？

すべてのレビュータスクは、エンティティ 360 フレームワークのエンティティビューで処理されます。

ビジネスエンティティ ActiveVOS ワークフローアダプタを使用している場合、どのタスクインボックスを使用すればよいですか？

[スタート] ページとエンティティビューの Informatica Data Director のユーザーインターフェース構成では、エンティティ 360 フレームワークタスクマネージャとタスクインボックスを使用します。ビジネスエンティティ ActiveVOS ワークフローアダプタで従来のタスクインボックスを使用すると、エラーが発生します。

付録 A

用語集

- [用語解説, 36 ページ](#)

用語解説

business entity: **ビジネスエンティティ**

組織にとって重要なエンティティ。通常、組織は顧客、サプライヤ、従業員、製品、取引先を表すビジネスエンティティタイプを定義します。例えば、[Person] というビジネスエンティティタイプがあるとします。顧客 John Smith は、[Person] タイプのビジネスエンティティになります。

Informatica Data Director のビジネスエンティティデータモデルでは、サブジェクト領域はビジネスエンティティに置き換えられます。

business entity services: **ビジネスエンティティサービス**

MDM Hub コードを実行してビジネスエンティティのベースオブジェクトレコードを作成、更新、削除、および検索する一連の操作。Java コードまたは JavaScript コードを実行してビジネスエンティティサービス呼び出しを実行するカスタムユーザーインターフェイスを作成できます。

business entity view: **ビジネスエンティティビュー**

ビジネスエンティティの圧縮バージョンを表すビュー。

Entity 360 framework: **エンティティ 360 フレームワーク**

ビジネスエンティティベースの Informatica Data Director (IDD)。エンティティ 360 フレームワークが有効になっている場合、IDD ユーザーは、マスターデータの編集および管理を [データ] ワークスペースではなくエンティティワークスペースから行います。

IDD Configuration Manager: **IDD コンフィギュレーションマネージャ**

サブジェクト領域のデータモデルに基づく Informatica Data Director アプリケーションを追加、変更、および管理するための Web ベースのユーティリティ。

lookup: **ルックアップ**

Informatica Data Director では、アプリケーションユーザーが選択できる値のドロップダウンリスト。通常、ルックアップ値は、ベースオブジェクトとルックアップベースオブジェクト間の外部キーを持つ物理ルックアップベースオブジェクトテーブルで定義されます。

Provisioning tool: **プロビジョニングツール**

ビジネスエンティティモデル、タスク、トランスフォーメーションを定義し、Informatica Data Director のユーザーインターフェイスを設計するための Web ベースのユーティリティ。

Informatica Data Director のビジネスエンティティデータモデルでは、IDD コンフィギュレーションマネージャはプロビジョニングツールに置き換えられます。

reference entity: **参照エンティティ**

ルックアップベースオブジェクトに関連付けられているビジネスエンティティ。

Informatica Data Director のビジネスエンティティデータモデルでは、ルックアップはビジネスエンティティに置き換えられます。

subject area: **サブジェクト領域**

Informatica Data Director では、ビジネスパースペクティブの単位として扱うことができるデータの集合。